

銘書から見る近世琉球の社会

—子孫に残したメッセージ—

鈴木 悠（那覇市市民文化財課）

【すずき ゆう】

1984年神奈川県出身。専門は琉球史。2011年から2014年まで浦添市教育委員会の嘱託職員、2015年那覇市文化財課に学芸員として採用され現在にいたる。

厨子に記された銘書の分析を中心に葬墓制からみた近世琉球社会の変化に関心をもっている。主な論文に「近世琉球における銘書の受容と展開について—浦添市内出土資料の分析を通じて—」『比較家族史研究』32号（弘文堂、2018年）などがある。



銘書とは「ミガチ」「ミーガチ」とも言いますが、厨子（蔵骨器に記された墓碑銘を指すものです。主に被葬者、亡くなった方についての情報が記されているものです。基本的には家族が子孫のために残した記録、プライベートな資料ということになります。銘書が記載される厨子甕は、お墓の中に置いておくものですので、なかなか外の人が見る機会がない資料です。そういうプライベートな資料を集めて分析することで、琉球沖縄社会の葬墓制とか社会の変化を知るための格好の資料となります。

これまでに報告されている資料は、発掘調査によって得られた資料を中心に4,424件あります。こうした成果が『琉球葬墓制資料集成（2）—銘書編—』というものにまとめられています。これは、沖縄国際大学の学術成果リポジトリでもご覧いただけますので、是非一度ご覧いただければと思います。報告されている資料は、やはり開発に伴って発掘調査が行われることが多いですので、開発が旺盛な那覇市・浦添市域に資料的には偏っています。都市と、その周辺部分から得られた資料が、今のところ多いということです。

では、銘書に何が書かれているのかということについてですが、まず一つは紀年、亡くなった方の死去年、洗骨年とか、あとはこの方のお墓から別のお墓に移されたときに移葬年とか、改葬された年といったものが書かれています。

そして、被葬者についての情報です。亡くなっ

た方の当時の近世ですと身分制社会ですので、身分、位階、性別、年齢といったものが記されています。一つずつ見ていくと、身分というのは士か百姓かという大きく分けて二つの身分があります。当時、系持ちといわれた系図を持てる人たちか、無系（ムチー）と呼ばれる百姓身分かに分かれていて、その身分によっても書き方が少し変わってきます。というのは、士は門中の中に何氏というのが付きますので、銘書の中にも向（ショウ）氏とか毛（モウ）氏と書かれているものもありますし、百姓身分だと村に帰属していますので、何々村、勢理客村とか、宮城村と書かれているものもありますので、こういう属性を記すこともあります。

もう一つは、位階です。何とか親方とか、何々親雲上という言葉は時々お芝居とかで聞いたことがある方もいらっしゃるかなと思いますが、実は位階だけで身分を判別するのは困難なところがあります。親雲上とか、筑登之といったものは士にもいますし百姓にもいるので、親雲上と書かれているからうちのご先祖様は士族に違いないと判断するのは、なかなか難しいところがあるようです。

もう一つ性別の記し方ですが、誰々の男子、女子という書かれ方はよく見られます。女性ですと父親との続柄、例えば、何々親雲上女子の誰々というふうに書かれるなどです。これは系図も同じですけど、父親との関係性の中で女性の名前が説明されることもあります。

最後にその他での記載事項としては、お墓を作っ

た時期、造墓の理由といったものとか、墓を移転したことなどといった記録も銘書に記されることがあります。お墓の由来が記されることもあります。墓地の取得について記されるものです。墓地の取得については似たような資料として瓦証文というものがあります。焼物に土地の取得の経緯が書かれたものを作って、お墓の中に置いておくことがあります。墓敷証文というものも似たような資料です。

一例として浦添の伊祖の入め御拝領墓から出てきている、呉勢さんという方の銘書があります。

『道光貳年壬午九月十四日洗骨仕置申候／浦添按司御乳母呉勢／嘉慶貳拾五年／辰十一月九日死／寿七拾壹／但かま戸銘苧／女子』

これを見てもみますと墓の儀は浦添御殿入め御拝領というふうになかなかきれいな字で書かれています。これは浦添按司という王族の乳母を務めた呉勢という方が、かま戸銘苧という方の娘さんということで、享年が71歳ということも書かれています。この呉勢さんという方が嘉慶25年に亡くなって、道光2年に洗骨をして、そのお墓は勤めていたところの浦添御殿から資金を拝領して作った（あるいは取得し）、お墓に関しては浦添御殿からお金をもらっていますということが記されている。一つの資料から、これだけいろんな情報が得られるものもあります。

本日は、銘書の話をしておりますが、銘書というものが現れる以前の状況はどうだったのでしょうか。銘書が登場するより前に、厨子は使われていました。どうも古琉球とかグスク時代と呼ばれる時代から、洗骨という葬法が見られるということが、これまでの調査で分かっています。銘書を記すようになる以前から、この亡くなった方、洗骨して納める厨子、臓骨器というものはあった。例えば、浦添ようどれにかつて使われていた板厨子とか、玉陵には銘が書かれていない石厨子なども入っているので、そういったものがあります。つまり、当時はどうも大事なものは骨だと考えていたようです。どの骨が誰かということは、もしかしたらそこまで



図1 浦添ようどれ板厨子（想像図）
浦添市教育委員会提供

重要な問題ではなかった可能性があります。つまり、お墓の中に入っている総体としてご先祖様で、具体的にこの骨が何代前のおじいさんとか、おばあさんかを特定するというのは、そこまで重要な問題ではなかったのではないかなというふうに思われます。

銘書がなかった時代の一例として、浦添ようどれの厨子をご紹介します。【図1】が板厨子の想像図で、【図2】が現在納められている石厨子の写真です。板厨子は厨子の分類上、最も古いタイプに相当するもので、朱漆に金メッキの金具を付けた唐櫃のような形をしています。木製のものから、のちに石厨子に仕立て直されたものです。中国産の輝緑岩という非常に緻密で硬い石を用いて作っている厨子です。装飾的にも朱漆を塗ったものから、お地藏さんのようなものが彫られたり、獅子や牡丹が描かれ、装飾的にも豊かなものになっていきます。



図2 浦添ようどれ西室1号石厨子
浦添市教育委員会提供



図3 銘苧古墓群B地区（4号墓下）
那覇市教育委員会提供

次に紹介するのが、銘苧古墓群B地区です。今は銘苧墓跡群という名称で国史跡になっています。4号墓の下層のほうにあったお墓が、【図3】のお墓です。鍾乳洞を使って、その開口部を石で塞ぐ、囲い込みの岩陰墓といいます。崖下に集団で安置されているお墓で、15から16世紀のグスク時代に相当するお墓になります。このお墓の上は現在、銘苧小学校の辺りですが、ヒヤジョー毛遺跡という当時のグスク時代の集落跡がありまして、集落とお墓が関連付けられる興味深い遺跡です。4号墓では、洗骨はされていますが、銘書は確認されていません。骨はきれいにまとめられています。かなり大人数納められている状況が確認できます。

銘書に話題を戻していきます。資料上確認できる最古の銘書は、【図4】の輝緑岩製の石厨子です。文字を読んでみますと「弘治五年 まさぶろうきたたんの大やくもい 五月吉日」と書かれています。こちらは那覇市立壺屋焼物博物館が所蔵している輝緑岩製の石厨子で、被葬者は、「きたたんの大やくもい」です。「大やくもい」という役職、位階が書かれています。いわゆる古琉球の官人に属する人です。この方が1492年に死去もしくは洗骨

されたということが分かります。しかし、「きたたんのまさぶろう」という人が一体誰かということなど不明な点も多くあります。もともと、この厨子がどこのお墓にあったのかについて、今のところ分かっていません。実は宜野湾市に小禄墓というところがありまして、そこにも同じような輝緑



図4 輝緑岩製石厨子（弘治五年）
那覇市壺屋焼物博物館提供

岩製の石厨子に銘書がある資料がありますが、これは翌年の1493年の弘治六年の銘が入っています。ですので、これらの資料から15世紀末ぐらいからは銘書というものが表れると理解することができます。

こういった石厨子の図像については私はあまり詳しくなく、唐子なのかお地藏さんか分かりませんが、お坊さんみたいなのが両サイドにいて、真ん中に分かりづらいですが3行ほど文字があって、弘治五年と、まさぶろうの名前が書かれていて、五月吉日と位牌のような形のものが書かれています。

さて、次に位牌祭祀の導入と銘書ということで、恐らく関連があるだろうということで紹介します。位牌をお祀りするということは仏教に関連するものかと思われれます。琉球への仏教伝来というのは、英祖王代とされています。13世紀後半に仏教というものが琉球にやってきました。最初に作られたのが浦添城の西か北かはっきりしませんが、極楽寺が最初にできて、これが琉球における仏教の始まりとされています。それから、次第に琉球の中の仏教というものが広まっていく中で、それぞれの家で先祖を祀る祠堂とか菩提寺といったものができていきます。

歴史的な資料で見えていきますと、朝鮮人の漂流記事の中に那覇での位牌祭祀の状況について記録がされています。これが15世紀後半です。仏教が入ってきて次第に広まっていった都市部の官人層の中で位牌祭祀というものが、だんだん始まりました。位牌というのは、亡くなった方のお名前、俗名とか戒名といったものが記されています。亡くなった人のお名前、いつ亡くなったかなどが銘書と共通しています。これが恐らく銘書を知る下地になったと考えられます。

位牌は昭穆というルールにのっって配置されます。元祖の方、初代の方を中央に置いて、後の世代を左右交互に配置していくというルールです。これを書いてから言うのもなんですが、実は昭穆以外にも他にもいろんな置き方がどうもあるようですが、一つ言えるのは一定のルールにのっって配置していくのが位牌の置き方です。こうして中央から始まった位牌の配置、位牌祭祀というものが町方といわれる町、首里や那覇以外の地方と

呼ばれる地域に、地方役人層という地方の行政を担っている人たちを中心に広まっていきました。ただし、この位牌祭祀が一斉に広まったわけでは、どうもなさそうでして、だんだんと浸透していていることが史料から分かっていて、恐らく地域差があります。

次に近世的な身分制度というものの成立も関連がありますのでご紹介します。近世は士と農が分離されていく、士農分離というものが始まるのですが、古琉球と呼ばれた時代は王と官人といわれる官僚との個人的な主従関係にあったのですが、こうした個人的な関係から士という身分を創出して、王府機構を支える身分集団というものが創出されます。

これと関連するものとしては、1609年に琉球に侵攻した島津氏が、その後の琉球の支配の中で人数改と宗門改を、それぞれ1635年と1636年に実施を求めています。これによって琉球の中で人口と戸籍というものの把握が可能になっていくわけです。その後、系図座が琉球の中で設置され、1689年（康熙28年）康熙年間の中頃に系図座が設置されます。実はそれよりさかのぼる10年前に、羽地朝秀が士に系図の提出というのを求めたのですが、どうもこれは徹底されなかったようで、制度的に完成するのが系図座の設置です。

冒頭紹介しましたが、近世は士と百姓とに身分が分かれているわけですが、士のみが系図を公的に所持することを認められていました。系図を持つことができるのが士というふうに言うことができます。1689年に創設された制度ですが、当時は地方にも王府の官人たちが住んでいましたので、1689年の系図提出に間に合わない人たちも出てきます。彼らは訟後といって、後から士となるべく申請許可を求めます。王府がそれを1712年に認めて、士籍への追加を追認をしていきます。こうしたことによって新参の士というものも登場してくるということです。

こうした状況下で銘書が各地に導入されていくわけですが、康熙年間の中頃（17世紀後半）から次第に沖縄島の各地で銘書の記された厨子が現れ

てきます。士も百姓も導入時期に、実は時間差がそこまでありません。士と百姓とも資料数は多くないという状況で。まだまだ普及というわけではなくて導入されたような時期が、大体このぐらいだろうと考えています。百姓のものには地方役人層のものが多くて、彼らを通じて中央の文化が地方にもたらされたと考えられます。併せて、位牌祭祀というものが地方にもたらされたとも考えています。【図5】の資料は、ちょうどこの時期、康熙27年の紀年銘を持つ資料です。左の帯のところに大清康熙27年というふうに書かれています。

銘書の浸透ということで、18世紀後半になりますと資料数が増大していきます。士族層のみならず地方の百姓の間にも銘書を記す習俗が広まってきました。恐らく、この時期ぐらいからお墓の中の厨子というものの整理が始まっていくのではないかと考えられます。【図6】の資料は乾隆22年と40年に、夫妻それぞれ洗骨されて、その後、お孫さんも入っているという夫婦と孫娘が合葬された事例です。こういうものがだんだん全体に広まってきました。

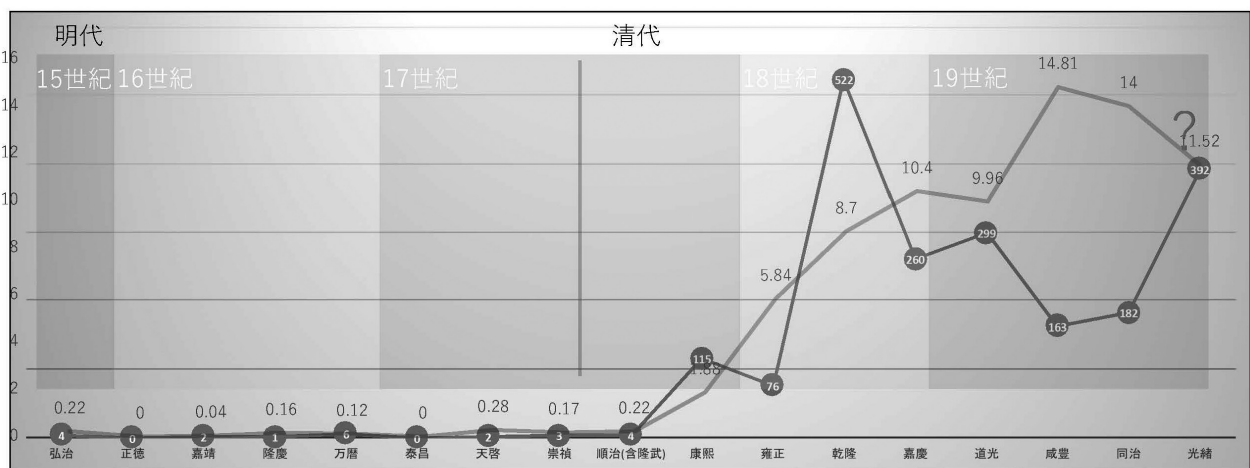
紀年銘を持つ資料について、2,031点分析しました【図7】。それで見えていきますと明代と清代に大きく分けて、それぞれの年号ごとに分けました。実数で厨子の数で見えていきます。明代は資料数が少ない。清代の康熙年間ぐらいから115点となっていて、乾隆年間522点と、だんだん増えていきます。年号ごとにやっていると在位年数の短いものだと資料数が減ってしまうので、数量を在位



図5 沖縄県立博物館・美術館
「ずしがめの世界」2006より転載



図6 前田・経塚近世墓群 南小島原地区56号墓 6号厨子
浦添市教育委員会提供



青い線は厨子の数、赤い線は厨子の数を在位年数で割った数値を示す

対象資料は2031点

図7 紀年銘を持つ資料の推移

年数で割って「数量／年」としてグラフに示しました。康熙年間からだんだん右肩上がりに上がっていき、状況が見てとれるんですが、実は最後の同治以降、光緒ぐらいのところから下降していきます。これはこの時代に仕立てられた厨子の多くが、お墓の中に入っていて、子孫の方がお祀りしている状況なので比較的新しい時代のものの資料数が少ないのではないかなというふうに考えています。

さて、厨子の配置はどうあるべきなのかというのは、恐らく18世紀中頃、後半ぐらいから各所で議論がされていきます。『四本堂家礼』という家の儀礼について紹介してまとめた本の中に「墓二厨子居候儀、昭穆之次第を以可致安置候」と書かれていまして、墓も位牌と同じように秩序だった配置にすることが規範として示されています。恐らく、位牌祭祀が浸透していくことによって、こうした概念が出来上がっていったのではないかと考えています。

銘書のない厨子、もともと銘書というものが始まる前から厨子はありました。こういったものをどのように扱うのかというのが問題になっていくかと思えます。先祖のはずだけれど、誰なのか分からないというものは、銘書を見ていくと大体分からないものはひとまず後世に託していることが見えてきます。あとは、シジタダシというもの、何か家とか社会に悪いことが起きたときに、家系を整理していくことで良くしようということが行

われます。そうした中で厨子が整理されることがありました。そうしたときには、銘書が書き加えられたり消されたりするというものが見えます。シジタダシの影響ではないかなというものは琉球処分期前後、つまり社会的動揺がある時期、社会不安が多い時代にこういった現象が見られるような印象を持っています。【図8】は18世期中頃に洗骨された夫婦の厨子に、1894年、100年以上たつてから、その子どもを追加したという資料です。まさにこういう事例がみられるのです。

【図9】は内間西原古墓群で、少し時間ないのでもう一度見ますけれど、お墓を那覇市の銘苺にあった所から今の内間の墓に移したんですが、このとき厨子に銘書がなかったのが誰か分からなかったのですが、もともとの墓は私たちしか使っていないので今の墓に移ってきたのですが、誰の厨子か分かったならば銘書を入れてくださいということを親族や子孫に当てて残しているものです。

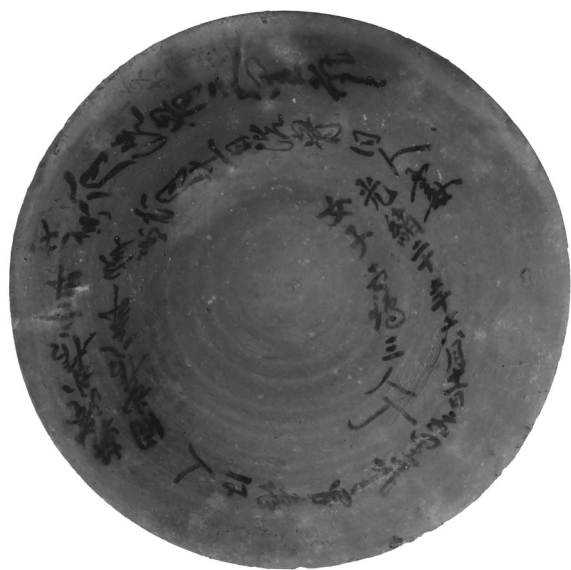


図8 前田・経塚近世墓群 南小島原地区62号墓 2号厨子
浦添市教育委員会提供



図9 浦添市教育委員会『内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ・内間西原近世墓群』2004より転載

こういうものもあれば、伊江御殿という王族の史料にも『無銘書厨子由来記』というものがあります。これは伊江御殿墓という、重要文化財になっているお墓の隣に野ざらしにされていた二つの厨子があって、これはもともと伊江家の墓地であるので一門の厨子であるだろうということで、そのままにしておくのは忍びないので脇御墓に移したので、この厨子について誰か分かっていたら適切に処理するようにということを文書で記録し残したのです。つまり、王族でも分からない先祖がいるような状況がありました。

駆け足で紹介してきましたが、最後に、近年、宮城先生がおっしゃっていましたが、近年霊園の移転とか、墓じまいをする家が増えてきていて、

だんだん、厨子を廃棄するケースも増えてきています。貴重な資料が日々、失われていく状況があります。大体それを受け入れるのは自治体なんです。自治体でもなかなか受け入れるための保管スペースがないというところがあって、痛しかゆしの状況です。こういう記録と保存に課題があるのですが、銘書は近世という時代を生きた人々の暮らしとか、葬墓制がどのように変化していったのか、現在につながっていったかというのを、われわれに教えてくれる貴重な歴史資料です。今後もこういった資料を集めていって、さらにこういう歴史研究というものを深化していきたいなと思っています。

当日配布レジュメ

1 銘書とはなにか

- ・ 銘書（ミガチ）とは、厨子（蔵骨器）に記された墓碑銘
- ・ 主に被葬者についての情報が記される
- ・ 家族が子孫のために残した記録（プライベートな資料）
- 琉球・沖縄社会の葬墓制や社会の変化を知るための恰好の資料となる
- これまでに報告された資料は4000点を超える
- ・ 『琉球葬墓制資料集成（2）—銘書編—』2021にまとめられる
- 沖縄国際大学学術成果リポジトリで閲覧可能
- ・ 報告資料は地域的に那覇市域・浦添市域に偏る（都市とその周縁）

2 銘書には何が書かれているのか

- ① 紀年（死去年／洗骨年／移葬・改葬年／不明）
- ② 被葬者情報（身分・位階・性別・年齢等）
 - 身分：士（系持）・百姓（無系）※士は○氏、百姓は○○村などと属性を記すことも
 - 位階：親方・親雲上など ※位階だけでは身分を判別するのは困難
 - 性別：○○男子・女子など。女性は父との続柄「○○親雲上女子△△」など。
- ③ その他（造墓・墓の移転・などの記録）
 - 墓の由来が記されることも
 - 墓地の取得は「瓦証文」に記されることが多い。墓敷証文

3 銘書が記されるより先に「厨子」というものがあつた

- ・ 古琉球（グスク時代）から洗骨をする葬法がみられる
- ・ 銘書を記すようになる以前から厨子はあつた
- 例) 浦添ようどれの板厨子や玉陵にある無銘の石厨子など
- ・ 大事なものは骨。遺骨が誰なのか把握するのはそこまで重要な問題でなかった？
- ・ 確認できる最古の銘書は弘治5年（1492）の輝緑岩製石厨子（壺屋焼物博物館蔵）

4 位牌祭祀の導入と銘書

- ・琉球への仏教伝来は英祖王代とされる（13世紀後半）
→浦添城の極楽寺
- ・祀堂や菩提寺ができる
- ・朝鮮人の漂流記事に那覇での位牌祭祀が記録される（15世紀後半）
- ・位牌には故人の名前（俗名や戒名）が記される
→銘書を記す下地ができる
- ・位牌は昭穆に配置する ※その他の配置方法もある
→元祖を中央に配して後の世代を左右交互に配置するルール
- ・地方へは地方役人層を通じて広まるが、浸透する時期には地域差がある

5 近世的身分制度の成立

- ・「士農分離」
→古琉球的な王と官人との個人的な主従関係から、
士身分を創出し王府機構を支える身分集団を創出した。
- ・島津氏の命により人数改（1635）と宗門改（1636）の実施
→人口と戸籍の把握が可能に
- ・系図座の設置
→康熙28年（1689）1679に羽地朝秀の提出令が先行
- ・系図の登場
→士のみが系図を公的に所持することを認められる
- ・追加の系図編集の許可（1712）
→「訟後（うったえおくれ）」の追認。「新参」士の登場

6 銘書が各地に導入と浸透

- ・康熙年間中頃（17世紀後半）から次第に沖縄島の各地で銘書の記された厨子があらわれる
- ・士も百姓も導入時期に時間差がない
→王家や上級士を除く。士と百姓とも資料数は多くない
- ・百姓のものは地方役人層のものが多く、中央の文化が地方にもたらされた
→位牌祭祀もあわせて地方へもたらされたか？
- ・18世紀後半から資料数が増大する（習俗の浸透）
→士族層のみならず、地方の百姓の間にも銘書を記す習俗が広まる
→この時期頃から墓の整理が始まったか？

第43回南島文化市民講座

葬墓制からみる近世琉球社会
－祖先と子孫の対話－（報告集）

発行日 2022(令和4)年2月28日
編集 沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所
発行所 沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所
沖縄県宜野湾市宜野湾 2-6-1
TEL.098-893-7967
印刷所 有限会社サン印刷
沖縄県島尻郡南風原町兼城 577
TEL.098-889-3679
